

大村照夫教授のご退職にあたって

経済学部長 大石 邦弘

大村照夫先生は、2015年3月末をもって名古屋学院大学を定年退職されました。先生の在職期間は、44年の長きにわたります。2014年に大学創立50周年を迎えた本学の歴史とともに、歩んでこられたこととなります。ここに、本学と経済学部を代表して心より感謝の意を表したいと思います。研究室から、時には教室から先生のご趣味であられる三味線の音が、聞こえなくなるのは寂しいことです。

大村先生は、1945年1月に広島県呉市でお生まれになり、地元の高校を卒業後、同志社大学経済学部に入學され、引き続き同大学院経済学研究科で研鑽を積まれました。本学には、1971年4月に経済学部助手として就任され、1974年には講師へ、1977年には助教授へと順調に昇進され、1987年には経済学部教授に昇任されました。また先生は、1999年1月に、同志社大学より『新マルサス研究』で博士（経済学）の学位をうけておられます。先生は、本学に就任されて以降、学部専門科目である「経済思想入門」や「経済学史」を、大学院でも「経済学史研究」、「社会思想史研究」を担当されてきました。先生のご専門である18世紀イングランドの思想家をベースにした授業を展開するに最適の科目でありました。また大村ゼミは、常に人気ゼミとして毎年定員いっぱいのゼミ生を擁し、多くの卒業生を社会に送り出してこられました。

大村先生の研究対象は、18世紀イングランドの思想家たちでした。アブラハム・タッカー、ウィリアム・ペイリー、トマス・ロバート・マルサスの思想を中心に研究を続けてこられました。経済学者にとって18世紀イングランドといえば、アダム・スミスやデイヴィッド・リカードを思い起こし、彼らの大きな業績に目を奪われてしまいがちです。しかし、先生は自然法思想から功利主義思想へ転換していく歴史の流れの中で、彼ら3人の業績とそこに息づく思想を丹念に考察されてきました。経済学そして政治学も含め、社会科学の今ある姿、そのまさに源流を探究し続けてこられたとあってよいのではないのでしょうか。先生の最初のご著書である『マルサス研究』のはしがきに、「……やっと研究の出発点として本書を出版することになった。」と書かれています。それから約10年の時を経て、『新マルサス研究』が上梓されました。出発点から30年を経た今、先生は彼らからさらに何を読み取っておられるのでしょうか。今後の研究活動を楽しみにしたいと思います。

大村先生は、ここ数年体調不良に悩まされておられました。お身体が言うことを聞かない状況には、先生ご自身が一番歯がゆい思いをなさっておられたと思います。先生が、体調を回復され、新しい人生をご健康で過ごされますように心よりお祈り申し上げます。